終焉世界のラグナロク

利瀬 時夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終焉世界のラグナロク

【Ｎコード】
Ｎ３８２３ＢＡ

【作者名】
利瀬　時夜

【あらすじ】
「どうしてこうなった？」
突如として見慣れぬ場所に帰宅途中召喚され、そのまま森に放り出される主人公、久実河啓一。彼を召喚したのは、その世界を司る神様だと言い、神様は彼に『勇者を倒して欲しい』と告げたのだった！
勇者として召喚されたのに、何故勇者を倒さなければならない？
疑問に疑問が重なりながらも、元居た国への還り方を試行錯誤し、旅を始める啓一。
旅の途中で様々な仲間達や人々と出逢い、別れを繰り返しながら成

長して行く啓一達に降り掛かる脅威の選択とは！？
果たして、啓一達は投げ掛けられる問題を、迫る脅威の選択を乗り越える事が出来るのだろうか？
出逢いと別れを繰り返し、成長しながらもその世界の本質を知る彼等の、終わり無き世界を舞台に繰り広げる異世界戦記系ファンタジー此処に開幕◆◆◆不定期更新、更新遅滞が多々有ります。残酷な表現や、Ｒ１５程度の性描写が登場しますが、宜しくお願い致します。それではどうぞ

第一章登場人物紹介（随時更新）（前書き）

さてさて、どうもおはこんばにちわ。
利瀬です。
随分お久し振りな気がします。
さて、今回描く物語。
勇者対勇者と言う異例の物語。
己のエゴを貫き通す勇者と、
魔と人間の共存を目指す勇者。
彼には彼の、
彼には彼の意志を貫く道理がある。
それがこの物語の主旨で御座います。
それでは、登場人物紹介からどうぞ

第一章登場人物紹介（随時更新）

【名前】久実河啓一｜Ｋｅｉｉｈｉ　Ｋｕｍｉｋａｗａ｜
【年齢】１８
【性別】男性
【職業】高校生
【髪色】漆黒
【瞳色】漆黒
【口癖】『やれやれ……』
【体質】
『終無死刑』（デミスタル・グロウリメント）
【能力】
『夢創具現者』（ファンタジリア・デ・ドリームワークス）
『全知魔瞳』（インディフォルト・デヴィア・アイズ）
【武装】
不明
【台詞】
『俺の辞書に不可能の文字はない！！』
【性格】
シニカルな言動が特徴的な、華奢だが案外筋肉質な青年。
飄々で、余裕を持った言動を取り、何処か舞台に立つ役者の様な台詞を吐くが、それは元演劇部部長であった所以だと言う。
通称『ナポレオン』。不可能を可能にする事から名付けられた学校の学年では知らない者は居ないとされる程の一種の有名人。
運動神経並々、頭脳も並々だが、時折皆も思い浮かばぬ様な発案をするキレた頭の持ち主でもある。
両親と妹が事故死しており、己が一緒に旅行に行っていればこんな事にはならなかった、と無力さに嘆き懺悔し後悔している。
責任深く、何処か素直じゃない一面も見られるが、普段は人当たり

の良い心優しい青年でもある。
余り怒る事がなく、キレる何て持っての他だと言う。異世界に召喚されてからは『誰よりも強くなる』と誓っている。
暗殺術染みた某殺人鬼の技や、己に牙を剥く者は殺処分と言う、殺す事に躊躇いを持つ物の持たなくなれば躊躇わない。
しかし、殺した後は、敵国でも必ず供養しにいくのは、やはり彼の良心故なのかは、誰一人分からない。
ツッコミ役として活躍し、ボケに対する鋭いツッコミは人気を呼んでいる。

【名前】サクヤ
【真名】不明
【年齢】１６歳
【髪色】紫銀
【瞳色】真紅
【種族】悪魔（エンデ・エヴィル）
【魔法】
『迅風系統』（デ・ヴィアント）
『氷結系統』（ジ・アイシメート）
【武装】
『短剣』（ショートソード）
『投擲ナイフ』
『魔銃』（ウィッチクラフト）
【台詞】
『ず――っと着いて行くんだからっ！！』
【性格】
主人公に拾われ、名付けられた華奢で小柄な少女。
主人公に一生着いて行くと言う『自称嫁宣言』もしている。
冷静沈着に見えるが、表情豊かで、運動神経頭共に良い。
魔力に敏感で、強い魔力に触れると酔う事がある。

人間にとっては忌み嫌われる種族でもある悪魔の種族。
悪魔の中でも心優しい故、人と仲良くしようとも悪魔であるからとの理由で避けられ、時には魔法を放たれる。
十五夜から十六夜にかけては危険で、猫同様発情期に陥るらしい。
ノリが良く、冷静なツッコミ役。
涙脆く、実質脆弱で、撫でられる事、人の温もり、褒められる事が好きな、羞恥心が鈍い子。

【名前】ギル＝ヴァラン＝アームストロング
【年齢】１７歳
【髪色】金色
【瞳色】金色
【種族】人間（ヒューニム）
【体質】無し
【能術技巧】
『武装破壊』（ウェポン・ブレイク）
『魔法破壊』（マギ・ブラスト）
『我流剣術』（ワン・ズ・ソードアーティング）
【特業】
『荒狂鬼神』（エルバシ・ル・デルフェオーガ）
【台詞】
『く、フ、ァハッハッハッハッハッハッハ！！！！！　良かろう、その言伝、確かに預かったァッ！！』
【性格】
世界中を旅する事が夢の、賞金稼ぎ。見た目のその熱血さよりは細く華奢で筋肉質
元々『王政国家マスケルディア』の騎士団だったが、手違いにより脱隊を命じられ、今に至る。
騎士団の『アル＝フ＝ウォンレッダ』と言う今の騎士団長とは未だに友人であり、時折酒場に現れる彼と飲み明かすほど。

寛大で、無駄に資金のある男。
能術技巧の全ては我流で、魔法や武装破壊も我流。
心優しく、無駄に暑苦しいのが特徴的。冷静沈着な啓祐とは正反対である。
男気熱い男で、王道を歩む事を目する。主人公を好敵手(あいぼう)と称し、飲み仲間としている。
無駄な殺生はしないとの事で、怒ると全てを薙ぎ払う『荒れ狂う鬼神』と言う全能力を解放する破壊業を発する。

【皇国（帝国、王国、学術国）兵の皆さん】
【通常兵】
【強化兵】
【指揮官】
【銃器兵】
【衛生兵】
【水兵】
【竜騎兵】
【特攻兵】
【諜報兵】
【偵察兵】
【前衛兵】
【後衛兵】
【盾壁兵】
【進槍兵】
等々

第一章主要用語紹介（随時更新）

『レジェンディア』
主人公の召喚された異世界。
合計六大陸に分裂しており、それぞれがそれぞれで役割をこなしている。
?:東方大陸
?:西方大陸
?:北方大陸
?:南方大陸
?:中央大陸
?:浮遊大陸
何処の領域にも納まらないのが浮遊大陸で、周期をかけて世界を巡っているのだと言う。
十年に一度世界に勇者が召喚される事となっており、丁度主人公は十年目で召喚されたのだと言う。主人公は東方大陸に召喚される事となる。
『第零血盟』と呼ばれる大陸を司る頂点達の集まる集会もあり、これに出席するのは皆『司界者（ルシア）』と呼ばれる者達だけである。『司界者』は百年に一度の割合で交代が為され、『司界者』の力は軍神と呼ばれる召喚獣をも一撃で殺す力を持つと言う。

『物質世界（マテリアル・ワールド）』
地球の、それも人間界を指す言葉。
物質や法則で完全支配された世界の事を指す単語。
十年に一度、勇者として召喚する為の媒体でもある。

『司界者介入禁止令（ルシア・デ・ルエート・アティブネス）』
司界者を決して戦争に介入させてはならないと言う皆で決定した法

律。
破った者には神の鉄槌と言う恐ろしき罰が待っていると言う。神の鉄槌＝天上の裁きと言う話もあり、天上の裁きを受けた者は欠片一つも残らず消え去る運命とも言われている。

『魔力』
常人には不可能な手法や結果を実現する力の源。
自然界に満ち溢れており、精霊の力とも呼ばれている。

『魔法』
魔力を媒体として発動する超常的克神秘的な力。基本的に黒魔術と白魔術に大分類されるが、この分類は便宜的な物で、実際時魔術や空間魔術等も存在するため数は不明とも言える。
文化文化、居場所居場所で魔術発動条件は違い、それが自然界の精霊に干渉する事で発動する魔術と、自然界に干渉するだけで発動するかの違いや、神への祈りや誓い、生贄により発動する犠牲儀式魔法なども民族間では存在したりもする。一般的に魔法は『マギ』や『マジェスタ』と呼ばれ、魔法相殺、魔法発動無効化装置等が今では存在する。『水晶（クリスタル）』と呼ばれる魔力により生成された魔力の塊を媒体に発動する事も可能。他にも『妙技』や『珍技』、『魔道』や『魔導』とも呼ばれる力でもあるが、それはやはり文化の違いとも言える。

『詠唱（スペル）』
魔法を発動する際に捧げる言の葉。
長ければ長い程、その魔法の級（クラス）は高く、威力も大きい。

『技巧能術（アートスキル）』
剣術、槍術、弓術、武術、流術を指し、技としてそれを確定する為の能力手段。

魔法を持たない者は、この力を強力化させ、単独でも最前線を戦い抜ける様に日々訓練を怠らないと言う。相当なスキル所持者は最前線でも主力を張れる程。

『王政国家アクトマレシア』
通称『王国』。時代の波に飲まれた悲運の国ともされ、伝説にも残る覇王の血統を引く『朱覇（しゅは）』司界者エルシェア＝ロン＝スザクがアクトマレシア家興したのを発祥とする、由諸正しき国家。覇王の遺産『朱覇の指輪』を代々受け継ぐ三国の一つ。同盟国や属国は多く、関係は概ね良好。一部を除く。人口約３０００万人を誇る国家で、グラティアと呼ばれる一騎当千にも及ぶ朱天騎士を保有する強国でもある。しかし、建国から３５０年の時、隣国であった『皇帝国家テンペシア』の滅亡により、領地拡大するもその分、王国を滅ぼし、その領地を全て得ようとする国家との戦争により、第一時期のアクトマレシアは滅亡。そして新たにアクトマレシアとして建国された現在は概ね関係良好、領土もそこそこと言った状態で存在している。

『皇帝国家エスペンティア』
通称『皇国』。一度帝国に滅ぼされたテンペシアの復興後の姿。消失を遂げた国家とも呼ばれており、もう一つの覇王の血統を引く『碧覇（へきは）』司界者ラヴニア＝アスケルニーヴ＝ゲンブが存在し、覇王の遺産『碧覇の断片』を保有する国家。同盟国と言うか連合国『連合国アスケメディア』の軍を駐留させようとした親派がアスケメディアが武装蜂起。この隙に乗じて『帝政国家アルトレスタ』軍が侵攻し、内乱状態にあった皇都エスペアを包囲する。だが、それから数日後、謎の大爆発により当時のテンペシアは滅亡した。エスペンティアはテンペシアの残骸を排除する代わりに戦死した者達や罰初に巻き込まれた民間人を供養する儀を行い、皆を納める教会を造り上げた。ヴァスタと呼ばれる第一王子も程無くして戦死する。そしてテンペシアは完全滅亡したと言う。現在エスペンティアの人口は２

５００万人弱を持ち、中にはテンペシアの生き残りも存在するらしいが、見た事はないと言う。

『帝政国家アルトレスタ』
通称『帝国』。全土に覇を唱える最強の軍事国家。最後の覇王の血統を引く『黄覇（こうは）』司界者エスケア＝ルル＝ビャッコが存在し、覇王の遺産『黄覇の契剣』を保有する国家。東方大陸の大半を領有する強国で、元は『エスシア連邦』と呼ばれる『アルトレスタ』『ヴァイツ』『コーディアンツ』の三大陸に跨る連邦大陸の都市国家の一つに過ぎなかったが、共和制、帝政と政治形態を変える過程で本格的な軍事国家と化し、今やエルディアンテで、一、二を競う大国となった。建国当初から協議制が根付いているため、国内の法制度は先進的克合理的。階級差別や奴隷制度は存在はする物の、市民の生活水準は極めて高い。実力で上の級に上がる事も許可されている。技術大国として発展した国家は、様々な軍事兵器を所持しており、空中浮遊要塞『要塞艦隊（ゴルモア）』や『軽巡艦隊（シヴァ）』、『殲滅要塞（ルシフェル）』等と言った要塞艦隊が多く空中を浮遊している。人口は４０００万人と大陸の中ではダントツでもある。

『神徒国家ヴァルエルータ』
通称『神国』。エルディアンテ全土に伝わる宗教、『サスティヴァ教』の聖地。厳密には国家とは言えないが、一応政治形態や軍事形態が整えられている為、国家として扱われている。あくまでサスティヴァ教修行の地である此処は、政治形態が整っているとは言え、其処まで深くなく、教団支援者や多額の寄付金を難民の救済に務めている、どちらかと言えば非政府的機構国家。また、大僧正がマスケルディアとアルトレスタの王位継承に関わる立場に居る事から、ヴァルエルータは国際情勢に対して一定の影響力を持つ。

『学術国家エルグラス』

通称『術国』。覇権を狙う魔法に置いては相当の実力と実戦経験を持つ国家。覇王の血統を引く『蒼覇(そうは)』司界者スサナ＝エル＝ソウリュウが存在し、覇王の遺産『蒼覇の盟壁』を保有する国家。エルディアンテ大陸のアハト大砂海を越えた先にある西を納める大国。大陸中央に広がる平野部を領土とし、諸氏族の連合体として誕生した国家。国の殆どが魔法を扱える人種で、魔法を所持し、騎士にも立ち向かい、歯向かう、戦える部隊を『蒼空魔団(ラヴルスカイズニエーカー)』を保有する珍しい国家でもある。覇権を狙う国であるが、アルトレスタ帝国との戦争で大敗。現在は劣勢に立たされている。軍国化制度の軍事組織を基本とした国家で、帝政政治形態を持つ。人口は１５００万人と少なく、その約過半数が魔法使いである。

『連合国家アスケメディア』
通称『連国』。様々な諸国家群と、諸氏族の連合体として誕生しか国家。覇王の血統を引く『紫覇(しは)』司界者マテラ＝リア＝イザナギが存在する、いや、と言うより、存在してくれた珍しい国家。故にこの国家はマテラにより建国された国家とも言え、マテラの『国家を纏める国家』の案から生まれたともされる。解放軍と呼ばれる軍事組織を持ち、人口はおよそ１０００万人。その内の三割は解放軍として最前線に立ち続けている。解放軍とは奴隷として扱われる民族人種、国家の解放を狙った外交圧力組織。エルディアンテ全土に解放軍は地下組織として存在するも、アスケメディア程の実力者の集う解放軍は中々存在しない。

『浮遊国家イエシニクリ』
通称『浮国』。危うい自由と解放に浮かぶ中立国家。覇王の血統を引く最後の者『黒覇(コクハ)』司界者マサムネ＝デ＝ミハトハバキと呼ばれる最後の血統者を存在させる、覇王の遺産『黒覇の魔晶』を保有する浮遊国家。連邦時代から続く自治的国家で、サスヴァーン侯の手腕に自治問題が掛かっている。現在の元首はレルヤ＝ハル＝サスヴ

ァーン七世。魔法の蓄積された水晶の源でもある『魔晶』の産出する唯一の魔晶鉱を保有する。この魔晶鉱も管轄の内であり、無許可の密猟は禁止され、した者には罰が与えられると言う。近代の政治形態は帝国よりで、だが、帝国から人々を解放しようと言う意識は変わらず、解放軍の組織と連絡を密通している。中立の立場から人口８００万人での停戦調停と称しつつ、己が国に有利な情報を発表した。その為、現在は中立国家と言うより、皇国に良好な関係を築く国家とも言える。

『紅十字騎士団』（ナイツ・オブ・スカーレッド）

王政国家アクトマレシアに存在する騎士団。
皆、白色の騎士服の裏に必ず真紅の十字架が刻まれているのを着ている事から名付けられた。
治安維持、犯罪者確保等治安関係に貢献する武装団体。
第一から第六まで存在し、第一から第二は上級任務のみ。
第三から第四は空中に舞う相手の場合出現時。
第五から第六は必ず出動する様に組み込まれている。

『黒鷲』（パトス・ブルグ）

地下にて存在する解放軍の団体。
主に奴隷解放、民族解放、種族解放や、国の場所の解放の為のデモ運動に似た行為の中でも最も強力なデモ活動と考えれば良い。
武装団体と変わらず、中には魔法を使える者や、技巧能術を扱える者が存在する。
皆無殺生を掲げえているも、止むを得ない場合は殺す事もある。

『白鷹』（エツヴァ・リグデート）

黒鷹の同様だが、地上にて情報を得る情報組織。
各個人で活動し、それぞれで収集した情報を酒場の奥等で出し合い、決定する協和制が決められている。

但し、中には罪人も存在する故、捕まれば一発で『獄牢（ラビリンス）』行きだと言う。
此方は武装もしているが、魔法や技巧能術より通常戦闘の方が強い。

『煌刃残光（エル・デライト）』
黒鷹白鷲を駆逐する組織団体。
皆が捕縛魔法や、確保する魔法相殺武器、魔法破壊武装等を所持している。
騎士団とは違い、部隊編成がない自由構造の組織。
単独で狩る者も居れば、集団で狩る者と多々。
魔物駆逐も行うが、対魔物戦の武装とはいえない武装ばかり故、戦うには少々難有りとも言える。

『戦誇女神（キリア・レ・ヴァルキューレ）』
戦好きの女神、通称『戦で倒れる運命の戦士を選ぶ女神』と称される団体。
対魔物専用の駆逐組織で、それこそ女性陣が多い。
鍛え方が違うのか、男性陣の場合は筋力トレーニングが多く見える。
魔法や技巧能術を主力に闘う事が多いので、通常戦闘は男性陣の団体に任せられる。

『騙嘘魔狼（リウフ・ス・フェンリル）』
戦誇女神の正反対の男性陣で結成された魔物駆逐組織。
『嘘を吐かれ騙された魔の巨狼』より称された団体。
近距離での通常武器主力攻撃を得意とした男性陣オンリー組織。
魔法や技巧能術は戦誇女神に任されるので、自分達は我が物顔で戦場を駆け抜ける事が可能。

第零節　どうしてこうなった？

「……え？」

間の抜けた声を上げつつ周囲を見回した彼は、視線を再び正面に戻し「……は？」と呟いた。

彼は断じて間抜けではない。無論、精神病の類に掛かっている訳でもない。

唯単に今彼の目の前で起きている事が、彼を今の状況にしていると言える。

視線を正面から右左に再び動かし、正面に戻してを数回繰り返し、漸（ようや）く落ち着きを取り戻したのか彼は小さく笑み、溜め息を吐いてから、呟いた。

「どうしてこうなった？」

◆◇◆◇

そもそもの始まりは、余りに眠かったので、授業中にも関わらず熟睡してしまった彼が、教師に教科書の角で後頭部に打撃を加えられた事だった。

「っ……ぅぅ、教師が暴力振るって良いんスか？」

実際倒れる程眠かったのだ。理由としては実に単純で、徹夜で買ったばかりの本を読み耽てしまったのだ。寝たのは実に朝の5時半、気付けば太陽の光が窓から差し込んでいたのを彼は覚えている。

後頭部に走る激痛に顔を顰(しか)め、「痛ぇぇぇぇ！！！」と叫びそうになりながらも、その叫びを必死に堪え、彼は己の後頭部を殴った教師を見上げ尋ねた。

「暴力？　愛の鞭だ、愛の鞭。俺の授業で寝るとこうなる」

「愛の鞭？　男のアンタから愛の鞭貰っても俺、喜びませんよ？」

痛みが引いたのか彼は体を起こし、首を傾げた。

「例えだ例え。比喩暗喩直喩表現、まぁどれでも良い。覚えておけ」

「現に国語教師がどれでも良いってアンタホントに国語教師か――ッば！？」

額をぶち抜かれた感覚――一体何が？

「口の聞き方には注意する事、俺との約束だ」

教師の教師らしい注意と、床に落ちる白亜のチョークの音を最後に、彼の意識は飛んだ。

――と。

体が軽い。
運ばれているのだろうか？
浮いている感覚がする。
背負われているのだろうか？
それにしては冷たい。

冷え性か？

徐々に意識が戻り、瞳を開いた彼の目の前に移った物は、見慣れた教室の天井ではなかった。

「……」

まるで水の中に居るかの様な、ふわふわとした浮遊感の中、彼の目に移ったのは漆黒の空間。

何も無い。

黒、黒、黒。

見渡す限り黒。

そして３６０度北海道宜しく地平線――だが黒。

「……何処よ此処」

まさか、チョーク直撃した位で死んじまったのか俺は！？　と頭抱えれば――同時、黒の空間はまるで紙を破る様にして引き裂かれ――頭から手を離し、差し込む眩い光に顔顰めた彼は、ポン、と空間から吐き出される。

ドサッと落とされた彼は、思い切り尻餅を着き、顔を再び顰める羽目になった。

「っ、ぅ……、皆揃って俺への扱い乱暴過ぎるだろ……、もっと丁寧に扱えよな、……、何時か拗ねちゃうぞ、俺」

ぶつぶつと不満を吐き出しながら、腰を擦り周囲を見回せば、彼は気付く。

「此処……、何処？」

其処は、見慣れた教室でも、校舎でも、学校でも、自宅でも、裏庭でも、公園でも、コンビニでもなく。

「何故に、ジャングル？」

アフリカ宜しく、木々の鬱蒼と生い茂る、ジャングルだった。

「……」

天を仰いだ彼は、達観した様な、それでいてやるせなさを込めた笑みを浮かべ、呟いた。

「どうしてこうなった……？」

第一節　自称美人の神と知りたがりの青年

チョークの強さを改めて知らされた彼、久実河啓一（くみかわけいいち）は、樹齢１００歳は超えているであろう、若干苔纏う巨木に背をぶつけると、ずるずると崩れ落ちる様にして座り込んだ。

一体全体何が起こっている？

一体何がどうしてこうなった？

疑問に疑問が重なる中、啓一はまず、状況整理を開始した。

脳内でこれまで有った事を順序立てて行く。

1、現代国語の授業中、チョークを額に投げ付けられた。

2、今に至る。

「……」

正直言わせて貰いたい、と啓一は再び天を仰ぎ見た。

「……どうしてこうなった？」

問い掛けても空は答えてはくれない。

唯一、ジャングル宜しく、奇妙な鳥がその問いに奇怪な鳴き声で対応してくれるだけである。

「……」

これは夢か？　彼の中でその仮定が立てられた。

「夢か……。

そうかそうか、そうだよな。

きっと俺、あのチョーク直撃した後気失って保健室に運ばれたんだよ。

で、そのまま寝てるんだよ、きっとそうだ、絶対そうだよ」

暗示の様に呟く啓一は「良し」と立ち上がり、「夢なら夢の中でしか出来ない事をしてやろうじゃないか」と自信満々な笑みを浮かべる。

「取り敢えず森抜けよう。多分森抜ければ覚めるんじゃないか？夢」

自問自答してから頷けば、服に付着した苔を払い落としてから振り返った――。

「グァ、ゥ、ルルルルルル……」

「……」

何処までもリアルな夢だな、狼みたいなのマジで唸ってるんですけど、とか何とか呟く啓一に、狼と呼ばれた獣は彼に対峙する様にして立り、低く唸り続ける。

可笑しいな、汗が止まらない。

「……３６計逃げるに如かず」

呟いた時には既に獣に背を向けて駆け出していた。
脳味噌が『逃げろ』と言う警報を全身に告げ、全身が『了解』とその警報に答える。
「ガァッウ！！」
「うひぃっ！！」
今度は避けろ、と言う警報が足に伝えられる。
啓一は伝えられた情報通り、１度立ち止まり、右に思い切り飛ぶ。
刹那、元彼が走り、横に飛ぶ為に立ち止まった場所に狼が牙を剥いて襲い掛かった。
右に飛んでいなければ今頃あの牙の餌食だっただろう。
ガツガツ、と貪られ、喰われ、最終的にはあれが雌だったならば子供の餌にされていた事だろう。
考えただけでゾッとする。
此方に正しく獣と言った獰猛な真紅に塗り潰された瞳を向ける獣は、低い唸り声を上げ、啓一へと一歩一歩確実に歩み寄る。
（ど、どうする？！　どっちへ逃げる？！　右？　左？！）
一発逆転を狙って裏に逃げるか――其処まで思考したその時だった。
「グゥゥラァァァァァァァァァァッッッ！！！！！！」
「……――ぁ」

俺、終わった。

陽光を浴び、煌く牙と、先程から止まらないのか、滴る涎も程々に。

獣は咆哮し、地を蹴り、彼に襲い掛かった。

自分が死ぬんだ、と悟った瞬間、今までの事が走馬灯の様に蘇る。

嗚呼、高校卒業したかったなぁ。

嗚呼、大学でキャンパスライフ送りたかったなぁ。

嗚呼、彼女欲しかったなぁ……。

嗚呼、ヤりたかったなぁ……。

そう言えば、一昨日買ったゲーム、まだクリアしてないや。

そう言えば、3日前に買った本、まだ読んでないや。

――嫌だ。

雑音（ノイズ）が走馬灯に走る。

生暖かい牙が、グズッと、啓一の肩に食い込み――。

そう言えば、俺の事、好きだって言ってくれた子居たっけな……。

――嫌だ。

あれは確か声が好きとか言っていたっけ……。

――生きたまま喰われるのは嫌だ。

物好きな子も居るもんだね……。

――生きたまま壊れるのは嫌だ。

でもさ……、嬉しいよ、そう言う事言われると。

――生きたまま、いや――。

――殺されるのは、嫌だ。

ぶしっ、と牙の食い込んだ場所から鮮血が噴き出す。
激痛が全身を駆け巡る。
全身を駆け巡った激痛は、彼を境地に誘う。

生への執着心の見せる覚醒。

それは現代の科学技術や医療技術、宗教や心理学では解明出来ぬ題材の１つで、解明出来ないともされている不可能題材の１つ。

死にたがりの見せる覚醒とは違い、生への執着は、相手を殺す事を躊躇(ためら)わない。
己が生きる為ならば、殺らなければならない相手は確実に殺る。

無殺生や武士道どうのこうの言っているのであれば、今直ぐ汗水流して土を耕す農民の足を舐めて来い。

腹掻っ捌いて、今直ぐ死ねよ。

彼の中の生と言う生が、生への執着心がそう叫ぶ。

次いで、一際高く心臓が高鳴った。
体が熱い。
頭が痛い。
瞼が重い。

肉体に発生した異常に追い討ちを掛ける様に、甲高い耳鳴りと嘔

吐感、激痛を超す超痛が彼を襲う。

「亜アァ嗚呼あぁぁぁぁぁぁあああぁぁぁあぁあぁああぁぁぁぁぁあぁぁぁ！！！！！！」

彼の口から突如として迸る絶叫に、獣は一瞬その体を震わせる。

痛みや啓一の体に発生していた異常が消え去ったかと思えば、今度は脳裏に女性の声が響き渡った。

――貴方なら勝てる。

でも武器も能力も魔法もない。

――貴方には貴方にしか分からない『能力（セカイ）』がある。

『能力（セカイ）』？

――そう、良いわ。手を貸してあげる――だから、探しなさい。

肉体から魂が抜ける様な――、それこそ幽体離脱と言うべきだろうか？　――の様な感覚に見舞われる。

そして仮初めの魂で構成された肉体は、声の主の手を取り――再び誘われた。

◇◇◇

「此処は……？」

白亜の地に降り立った啓一は、まず最初に噛まれたはずの肩を見た。
傷も、痛みもない。
何故？
疑問だが、それは後だ。
――此処は『能力（セカイ）』の断片が散らばる地。
貴方みたいに、召喚されたは良いけど、魔法ないし無能力。それに加えて武装もない子達が、私みたいな『美人』な神様によって招待される第一関門ね。
「……自称美人、か」
――何か？
「イエ、ナンデモアリマセンヨー？」
――若干棒読みなのが気になるけど、まぁ良いわ。
ほら、探しなさい？　時間ないわよ？
「時間何てあるのか？」
――ええ、制限時間は1時間。それ以上は貴方が逝くわよ？
首を傾げる啓一に、声は肯定してから小首を傾げて物騒な事を口にした。
「……1時間な、了解って、……ん？　……待て待て……。

え、っとさ……」

――何よ？　まだ何かあるのかしら？

「……神様？」

――ええ、神様。

数秒の沈黙と静寂。

そして、

「嘘？」

――ホント。

短い遣り取りを終えると、啓一は目を一瞬点にし、直ぐにぷるぷると震えれば、慌て、顔を引き攣らせたまま恐る恐る「な、なら、敬語にした方が、良い、です、か、ね？」と首を緩く傾げつつ尋ねた。

――此処まで来たら溜め口でも良いわよ。別に。

再び数秒の沈黙が場を支配すれば、啓一は後ろに居るであろう声に背を向け、正面の山を見据えてから、こう呟いた。

「何処まで行ってしまったのか知らないけど……、そう言うなら、溜め口で行こう、うん。

それじゃあ探して来る」

一歩目を歩み出し、山へと近付く。

近付く度に感じる山の圧倒的存在感は、膨大な能力（セカイ）の情報量や質量故だろう。

不意に、己の顔に笑みが浮かんでいる事を知れば、苦笑を漏らす。

彼にとって、能力（セカイ）探しと言うのは、宝探し同様。

しかし、今目の前にあるのは、宝以上の産物。

そう、情報の山。

啓一の中に芽生えた感情は、故に唯１つ。

「知りたい……、教えろ、その情報、全て……」

知りたがりの高校生は、此処ではアウトなのだろうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3823ba/

終焉世界のラグナロク

2012年1月12日20時55分発行